

韓国的高校における日本語学習の実態調査

An investigation of Japanese language classes at senior high schools in Korea.

金 恩 慶
KIM EunKyung

I はじめに—研究の目的と問題の所在

韓国では、第二外国語に対する認識やニーズが年々高まりつつある。なかでも日本語の学習者数、教員数、教育機関数は年々増加しており、世界における日本語学習者数を国別で比較すると、対人口比ではもっとも多くの日本語学習者を有している。その一因として、日本とは異なっており、第二外国語の学習が韓国では高等学校の段階から始まることがあげられる。さらに、最近では、中学校においても、第二外国語の授業を取り入れている学校も増えてきており上記の傾向に拍車をかけている¹。一方、早い段階から学習しているにも関わらず、なかなか外国語を「運用できる」レベルまでは到達できず、自信にも結びつかないという問題が指摘されている^{2,3}。

その要因として、生徒が英語以外の外国語を学習することについての明確な目的や動機が見つけられないまま、授業の一環としてなんとなく学んでいるという現状が指摘できる。生徒は成績のためにやむを得ず勉強しているという認識を持ち、学校では限られた授業時間に多くの内容を盛り込んだカリキュラムによって授業が行われていくという実情がある。つまり、韓国における外国語学習は、国は取り組む「時期」にこだわり、教員は決められたカリキュラムをこなす「進度」にとらわれ、生徒は「成績」のためだけに学習しており、三者がそれぞれ異なった目標に向かうという矛盾を孕んでいるのである。

ゆえに、早い時期から学んでいるにも関わらず、効果があがらないという残念な結果を生み出してしまっていると考えられる。このことは筆者自身が韓国で日本語を学んでいた10年前からすでに感じていることである。

そこで韓国における日本語学習者の現状を把握するため、高校生を対象として、日本語に対する必要性の認識、学習動機や目的に関する質問紙による調査を実施することとした。本稿では、その結果を報告し分析するとともに、日本語教育や第二外国語教育における課題克服の手がかりを模索する。韓国における日本語教育の「今」を報告し、今後の韓国の日本語教育の発展に多少とも寄与することができればと願っている。

II 日本語教育に関する先行研究

韓国における日本語教育は、植民地支配を受ける中、日本語が強要された時代に始まり、約35年間の歴史をもつ。現在、韓国で日本語を学ぶ若者は、この過去の歴史的事情から日本とい

う国への反感を持ちながらも、解放後の「現代の日本」の言語を学ぶという、いわば相反する感情を抱いたまま学んでいる状態であるといえるだろう。

つまり、日本という国が嫌いだから日本語は学びたくないという気持ち、またそれとは反対に、日本という国は嫌いだけれども、現代の日本への興味から日本語を学びたいという気持ちが混在しているわけである。そして、多くの高校生にとって日本が好き、あるいは嫌いという気持ちの以前に、進学を目の前に学習しなければならないという現状が先行しているといえるだろう。学習者は複雑な気持ちを抱きながら、ある意味強制的に学ばされていると言えるだろう。しかし、ある言語を学ぶこと、身に着けていくことは、今後、相手国への関心を増し、両国の関係にとって良い影響を生み出すことにつながるはずだ。以下、現在の韓国における日本語教育の問題点を順に明らかにしていく。

1 韓国における日本語教育に関する先行研究

河先（2013）は、韓国が日本に植民地支配を受けたことから始まる日本語教育について以下のように述べている。

植民地支配下において「国語」として日本語教育が行われた結果、韓国内には少なからぬ日本語理解者が誕生していたが、彼らは、1960年代から70年代にかけて日本語教育が再開された時に、日本語教師として活躍した。彼らの存在なしには、これほどまで急速に日本語教育が拡大したとは考えにくい。また、植民地支配期には、大半の人々にとって、近代的な知識にアクセスできる唯一の言語が日本語であった上に、日常生活においても日本語を強要されたため、日本語は言語生活のあらゆる領域に根を下ろすことになった。

確かに母国語が禁じられ、日本語が強要される植民地時代という過酷な時代において、人々は、母国語を使用してはいけない、母国語を守りたい、などという母国への言語に対する認識や意識より、目の前の生活を維持することの方が優先され、生きていく上で必然的に日本語に対するニーズが高まったと思われる。

河先（前掲）によると、その後の韓国社会における日本（語）については以下のように紹介されている。

解放直後の韓国社会では、何をおいても日本色を帯びた文物を払拭しようとする動きが起こった。日本語を話すまい、日本式の名前を呼ぶまい、日本の歌をうたうまい、日本人の物を買うまい、日本の人形やおもちゃを持つまいというスローガンを掲げた「すべからず運動」は、倭色のものすべてを排除することをめざした。

日本の植民地支配を受けた韓国では、解放後、強い愛国心に変わり、その影響は今でも根強く存在している。日本の文化開放⁴により、日本文化に触れ、日本への旅行などを通して日本の人々に直接向き合えるようになることで、日本に反日感情を持つ韓国人は全体的に少なくなってきた。しかし、この「すべからず運動」の現象は現在の高校生においてもみられる。詳しくは後半のアンケート結果の所で述べるが、韓国の高校生が日本語の勉強を続けたくない

理由として、「日本が嫌いだから」といった感情的な意見が見られることや、また反対に日本語の勉強を続けたい理由として、「日本人に韓国のことをきちんと知ってもらうため」という意見があるのは、かつて日韓が植民地関係にあったという事情が絡んでいると考えられる。

2 外国語教育に関する先行研究

吉島（2014）は小学生が外国語を学ぶ意義について以下のように述べている。

外国語の授業では子供たちは新しい言語を知り、それを自分の言語と比較するようになる。言語は多かれ少なかれその背景となる文化と結びついている。つまり、その文化を担う人間と結びついているのである。まず、子供たちは生活と考え方に違う可能性があることを知る。時には他の文化を知ることで目標文化と自分の文化との間の対立・差異と対峙することになる。こうした教室の中での経験が積み重なることによって、子供たちは他者に尊敬をはらい、差異を尊重するようになるはずであり、物事を相対的に見、考察する能力を育むことができるであろう。

外国語を学ぶことを通して異文化に触れ、他者への敬意を払うことや自他間の差異を尊重すること、利己的な思考から抜け出し他者への思いやりを育むことの重要性が説かれている。また、外国語を学ぶことについて金、鄭（2015）は以下のように述べている。

韓国語（または他の外国語）を習うことで、これらの見えなかった部分、見えにくかった部分を他の言語に照らして考えてみることができ、日本語の再発見をすることができるのです。

母国語しか知らない人は、ある意味自分の視点でしかものごとを捉えられないのかもしれない。最近では学校教育を始め、あらゆる場面で子供の時期から外国語に接することや学習する機会が増えてきている。上記の先行研究が指摘するように、理想的な外国語教育とは、やはり学んだ言語を通して、その国への関心や理解を深め、次の世代にもつなげるきっかけを作ることであろう。

Ⅲ 韓国人高校生の日本語学習における実態調査

1 本調査の意義

本調査の目的は、韓国人高校生の日本語学習における実態を明らかにし、そのことから彼らの日本（外国）語への意識や学習態度を分析するものである。そのため、まず韓国の日本語教育の背景について述べておきたい。

韓国における日本語教育は、1910年に韓国が日本により植民化された時代に始まった。その後、1937年の日中戦争の頃から、教育現場では朝鮮史の学習やウリマル（韓国語）が禁じられ、国語という名目の下、日本語使用が強要された⁵。70歳以上の人たちは、日本名への改名、日

本語を押し付けられるという時代を生きぬいてきたのである⁶。「もっとも近くてもっとも遠い国」という言葉に象徴される日韓関係が長い間続いてきたといえるだろう。

しかし、2000年頃からは、上記のような冷えた関係に変化がみられるようになった。例えば、長く禁止されてきた日本文化の開放や、2002年のワールドカップ共同開催などが挙げられよう。こうした日韓関係の変化にともない、韓国人の日本語に対する意識も著しく変化した。かつてのように、強要ではなく、日本文化に興味があるから、アニメが好きだから、日本のファッションに関心があるから、といった理由で日本語学習を始める人が若い世代を中心に増えてきている。

韓国ソウルの町を歩いてみると、日本語で話ができる現地の人に会うことは珍しくない。特に、ミョンドンやインサドンなどといった日本人に人気の観光地では、韓国語が分からなくても日本語だけでコミュニケーションが取れ、買い物ができるほどである。そこで働く人のほとんどは大人になってから独学で日本語を勉強した人たちである。片言の日本語であっても、毎日のように触れ合う日本人の観光客と積極的に言葉を交わす彼らの日本語力に、驚く日本人を目にすることも多々ある。

一方、学校教育の一環として日本語を学習している、あるいは、学んだことがある高校生や大学生はどうだろうか。覚えた単語は試験が終わると途端に忘れてしまい、学習した文法は卒業すると同時に消えていくという場合が少なくない。せっかく1年、または、1年以上かけて学習した日本語なのに、使わないで忘れていくことが非常に多い。

韓国における日本語教育は、教育者数、教育機関数、学習者数のいずれをとっても、常に世界の上位に位置している。しかし、数字上は日本語教育が盛んになっている一方で、聞けない、話せない、つまり、使えない学習者を生み出す日本語教育が相変わらず続いているのはどうしてだろうか。大半の韓国人が日本語学習を始めるのは、高校に入ってからである。本研究において、高等学校を取り上げることにした理由の一つは、まさにここにある。

韓国で日本語教育を受ける若者の日本語に対する意識全般を明らかにするため調査を実施することにした。筆者自身も韓国の高等学校で第二外国語として日本語と出会ったのをきっかけに日本語が好きになり、日本へ留学を決めたのであった。高等学校での1年間の日本語の授業は、多くの韓国人生徒にとって、その後の日本語との関わりに大きな影響を与える。筆者が日本語を好きになったのとは反対に、その1年で日本語が嫌いになる友人もいた。そのため、対象言語の好き嫌いが決まる最初の出会いの時期は非常に重要であると考ええる。

なお、高校では日本留学試験や日本語能力試験などの資格をとることを目標に学習することは少ないことを特筆しておく。

2 調査概要

(1) 被験者

韓国の高校生にとって日本語とは、学校教育の一環として行われている数多い第二外国語の中の一つである。下の表1に本調査の概要をまとめる。被験者のほとんどが高校生になってから日本語の学習を始めた者であり、また、被験者全員が日本への留学経験をもっていなかった。

韓国首都圏の私立高校の生徒252人を対象に質問紙法で調査をした。韓国の高等学校における英語以外の第二外国語クラスの教員は、ほとんど韓国人教員である。また、生徒もクラス40

表1 被験者のデータ

① 回答者数	韓国首都圏のイルサン市内の私立高等学校高校生252人
② 調査方法	質問紙法（質問紙は付録参照）
③ 調査時期	2015年8月
④ 教員	韓国語を母語とする教員
⑤ 生徒数	1クラス40名程度
⑥ 学習者の日本語レベル	ほぼ学習歴なし（数名中学校からの学習者有）
⑦ 学習者の母語	韓国語（100%）
⑧ 日本語科目の時間割	（例）月曜、火曜、水曜（週3回） 45分授業／1時間、2.25時間／1週間
⑨ その他教室外環境	日本語を使う機会はほとんどないが、アニメーションや漫画、映画など日本語の映像に触れることは可能である。

名程度で、生徒のほとんどが全く何も知らない状態から学習を開始する。日本語の科目は、高校2年次に1年間履修する。1時間のクラスは45分で、週あたり3回授業があり、約2.25時間学習することになる。また、それぞれの学校が異なった出版社の教科書を使用している。そして、学習者は、教室を一步外に出ると、自分から日本語を使用できる環境を求めることや、意図しない限り日本語を使う機会はほとんどない。日本人が英語を全く使う必要のない環境の下、英語学習をしている状況と同じである。

（2）調査方法

第二外国語として日本語を提供している首都圏の私立高校を訪問して調査をお願いした。日本語を担当している教員を通して、質問紙を配布してもらい、高校生に回答してもらった。

（3）分析方法

質問紙で回答してもらった自由記述式の調査結果を、KJ法等を用いて分析した。自由記述の質問項目は複数回答が可能である。また、有効回答数は100%として分析している。

3 結果と考察

韓国では外国語は英語という認識が少なく、外国語というと英語に日本語あるいは中国語、フランス語、スペイン語などといったようにもう一言語を加える。英語にプラスする形でもう一つ外国語を学ぶという認識が根付いている。それは、早い段階から外国語教育がなされていることや、また、就職活動などにおいてももはや英語は使えて当たり前とされており、他に何らかのスキルが必要な時代になってきているためである。反面、自分が何をしたいのか、何をすればいいのか、将来の夢や進路がはっきりみえていない高校生にとっては、目まぐるしい時代の変化やニーズに振り回されているといった側面もある。第二外国語への認識は高いものの、

実際には活用されていない理由は何だろうか。

韓国人高校生の日本語学習に対する意識について、彼らの学習そのものに関する（１）第二外国語の必要性の認識、（２）学習目的や動機、（３）実際の学校の日本語教育に関すること、（４）今後の日本語学習においての課題といった大きく４つのテーマに分けて調査を行った。以下にその結果を報告する。

（１）第二外国語の必要性の認識

第二外国語を勉強することへの必要性をどの程度、韓国人高校生たちが認識しているのかを探るため、「海外に留学してみたいと思うか」「第二外国語（日本語）の勉強を続けていきたいか」など９項目の質問を設定した。

「留学してみたいと思いますか」という質問に対しては、「してみたい」という意見が約74%にも上った。187名の被験者が外国留学に関して肯定的な意見を持っていることが分かった。今では外国旅行や留学などは、もはや実生活とかけ離れた夢のようなものではないのであろう。

そこで、留学する場合、どのような国に行きたいのか、及びその理由を尋ねた。留学先としては、アメリカや日本が圧倒的に多く、その次にヨーロッパ地域への関心が高いことが分かった。またアジアの隣国でありながらも、中国への留学を希望している生徒は２名しかなかったのに対し、日本は54名で圧倒的に多いことが分かった。（図１）

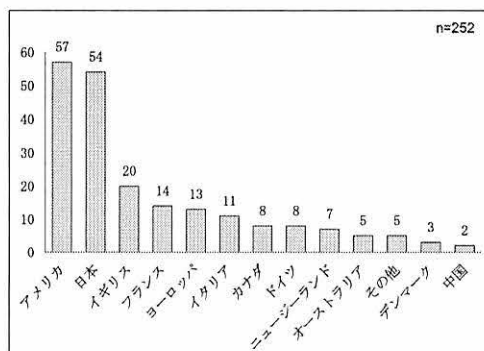


図１ 希望する留学先と人数

さて、理由についてみてみよう。一番多かったアメリカへの留学希望の理由は、やはり「英語をマスターするため」という意見が多かった。韓国でも英語力というのは、成績や将来の就職にも深く関係しており、英語の必要性は高く、また英語のスキルは当然身につけるべきものと見なされている。しかし、全体的にみると、語学やその他の勉強を挙げる意見は非常に少なく、全体のわずか22%にとどまった。高校生が外国留学を希望する理由としては、異文化体験をしてみたい、観光、旅行、本場の料理を満喫したい、現地の人との交流がしたいなどといった、その国や文化への興味の方が高いことが分かった。（図２）

日本語を学習する高校生がどのような展望を抱いているのかをみてみよう。全体の66%にあたる高校生が「これからも日本語学習を続けたい」と回答している。

「日本語の勉強を続けたい」理由としては、「今すぐには使えなくても、覚えておくと将来何

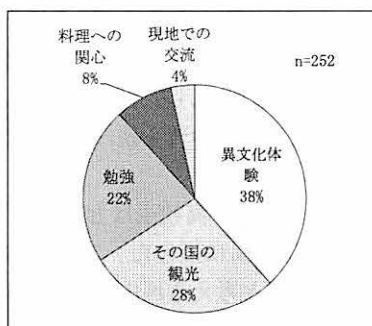


図2 留学を希望する理由

かに役立つかも知れない」という考えから、「続けて学習したい」という意見が約30%を占めていた。次に、「日本語の勉強そのものが楽しいから」という意見も約27%に上った。また、「日本に留学や旅行がしたいから」という意見が約16%で、「日本語に限らず様々な言語への関心があるため」という意見も約15%あった。また、言葉そのものよりも、「日本や日本の人のことを理解するため」、逆に「日本の人々に韓国のことを知ってもらうため」といった、文化理解のための一つの道具として勉強を続けたいという意見も約12%であった。(図3左)

反対に日本語の学習を卒業後に続けたくない理由としては、「日本語の必要性をそれほど感じないため」という意見が半数を占めた。または、「現在の日本語の授業が難しいため」「基礎が身についていないため学習に遅れが出ている」などの理由から、「これからは続けたくない」といった意見が約28%であった。続いて、「日本語の授業が楽しくない」という意見約17%、「日本が嫌いなため、日本語も勉強したくない」といった意見も約5%あり、国への関心がその国の言語学習への関心に影響を及ぼすことも分かった。韓国人の日本という国に対する先入観が未だに、若い世代の高校生たちにも根強く残っているといえるようだ。(図3右)

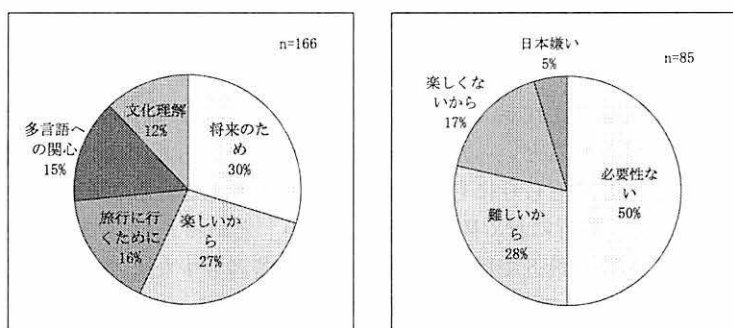


図3 日本語の学習を続けたい理由ならびに続けたくない理由

英語や日本語などの第二外国語は、学校教育で必須科目とされているため、学んでいる生徒がほとんどである。対象言語に対して興味が湧くかどうかはひとまず脇において置き、学習が強制されているわけだ。

日本語の勉強を続けたい理由をみていくと、韓国では日本語に限定せず、社会全体的に言語への関心が高いともいえるのではないだろうか。日本語の勉強を続けたくない理由からは、日本語の授業で行う活動が直接影響を及ぼしていることが分かった。このことは、初めて学ぶ外国語では授業内の活動が今後、その言語の学習を続けるか、止めたくなるのかという鍵をにぎっているといえよう。

それでは、日本語学習の有用性について、高校生はどのように考えているのだろうか。「日本語学習が役立つ」と回答したのは約75%に上った。実際日本語を使う機会がない高校生にとって日本語の学習が今、役立っていると考えた理由は、内進成績に関係がある必修科目の一つであるためだと予想される。(図4左)

一方、「日本語学習が将来に役立つと思うか」については「役立つ」と回答したのは約半数の49%であった。(図4右) この2つの回答傾向から日本語の学習が将来よりもむしろ現在に役立つと認識していることが指摘できる。つまり成績が重要なわけである。しかしながら、全体の約半数にあたる生徒が「日本語は将来役立つ」と答えていることは、外国語学習を近視眼的に捉えているだけではない認識が読み取れるもので、外国語学習の目的や教授法の重要性を改めて指摘された思いとなる。

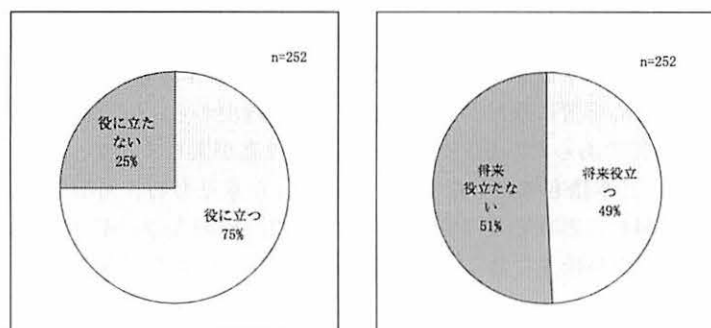


図4 日本語学習の現時点での有効性と将来の有効性への意識

例えば、様々な言語を学習しておくこと自体が有利だと考える意見や、就職活動の際にも、何か+αの面として評価されるといった意見が書かれていた。ある国について理解する場合にも、その国の人々に理解してもらうにも言語力は重要だと考えていることが窺える。

続いて多かったのは、「旅行に行く際に話せたらいい」といった意見であった。日本は韓国からは一番近い国でもあり、最近では旅行に行き来する若者も少なくない。訪れた際に話せたら便利であると考えているのであろう。若者たちが、高度なレベルではなくとも、日本語を使ってみたい、実際に日本に行ってみたいといった日本そのものへの興味や関心を持っていることを読み取ることができ、言語を通しての相互交流、異文化理解への道に灯りが灯っている思いとなる。最後に、「仕事に役立つと思う」と答えた意見がみられたが、その理由としては、「覚えておくと良い」、「旅行会社などに就職する場合に何か役立つかも知れない」といった理由であることが分かった。将来にプラスに働くものとして言語を捕らえている傾向もやはりみられる。(図5)

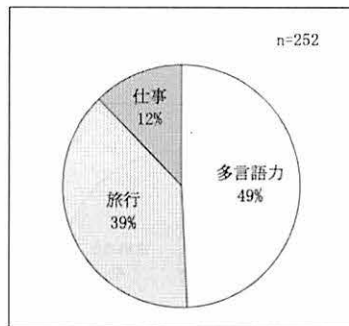


図5 日本語学習の将来性

以上のことから、韓国の高校生たちは第二外国語としての日本語学習について、目的や理由が明確でなく学んでいる現状が明らかになった。韓国の高校では、英語以外の第二外国語の履修を課しているが、多くの高校では、一つの言語しか提供していない。そのため、高校生たちは、自分が在学している高校が開講している外国語を必修として学ばなければならない。よって、自分の意思で日本語を選択した生徒ばかりではないということが影響している。後述するが、学習動機として、進路や成績のため、学校教育の一環であるからという回答が圧倒的に多かった理由はここに起因しているのであろう。また、ほとんどの生徒が高校から英語以外の第二外国語を学んでいるため、外国語はより身近なものになっているはずだが、彼らにとってはよいことばかりではない。なぜなら、就職活動の際に英語はけっして特別な能力とはみなされず、英語以外のもう一つの外国語能力が求められる時代になっているからである。こういった学校教育の事情や、社会的な圧力があるため、高校生たちは日本語学習に対する将来にわたっての明確なビジョンといったものは持ち合わせずに、ただ学習させられているという問題が生じている。

「日本語以外に習っている外国語はありますか」という質問では、半数以上の高校生が「ない」と答えた。日本の生徒の場合は、大学生になって初めて英語以外の第二外国語に触れることが多いが、韓国では、高校生の段階で第二外国語を学ぶのは当たり前で、場合によっては中学校から第二外国語教育を受けることも増えつつある。加えて、英語以外に第二外国語、第三外国語を勉強している生徒も珍しくない。約57%の高校生が「日本語以外にも勉強している言語がある」と回答した。しかし、この回答には英語が含まれていることも考えられるので、英語、日本語を除く外国語をどのくらいの割合で勉強しているのかについての数字は明確にできなかった。

では、日本語以外の外国語を学習している理由は何であろうか。高校生にとって、「これから先、大学進学や就職の際にも直接影響があるため」という意見がもっとも多かった。上述したように、韓国の場合、英語以外にも一つの言語力が求められる時代でもあるため、外国語への関心が高まっているからであろう。次には、「学校教育の一環として学び、その成績が自分の将来に関係しているため」という意見が26%あり、「自ら好きで学んでいる」という生徒は20%に過ぎないということが分かった。ここでも、英語を除外しなかったため、日本語以外の外国語が、英語を含むのか、含まないのかは区別がつかなかった点を反省している。ともかく、英語を含む外国語科目が、韓国では非常に大事な科目の一つであり、重要な能力の一部と

されていることへの認識の高さが現れている。(図6)

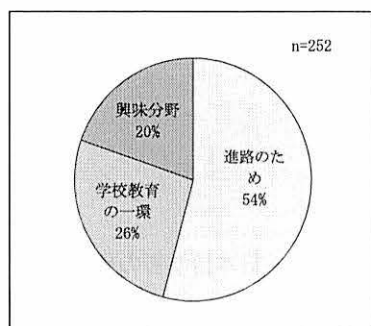


図6 日本語以外の外国語を学習する理由

(2) 日本語学習の動機

日本語の勉強を始めた動機について見てみよう。自由記述での回答である。動機としては、やはり「学校教育であるため」という意見がもっとも多く全体の約41%にも上った。彼らにとって、日本語学習とは、内発的および統合的動機による学習というよりも、学校教育だから、成績のために義務的にするといった外発的動機であり、道具的動機として学んでいるという意見が多かった。「学校教育＝成績」という公式があり、そこには「個人の成績＝就職・進学」という思想が横たわっており、「日本語学習の動機＝学校教育であるため」という回答と考えられる。多くの高校生にとって日本語学習は、自ら、好んで選んで始めたものではなく、学校教育の一環として、やるしかない、やらざるを得ない、成績のための一つの道具という認識が高いという傾向にある。他に動機として挙げられていたのは、趣味で始めたという意見が約23%あり、および簡単そうだからという意見も約22%で拮抗しており、また日本自体への関心についても約14%の高校生がもっている。(図7)

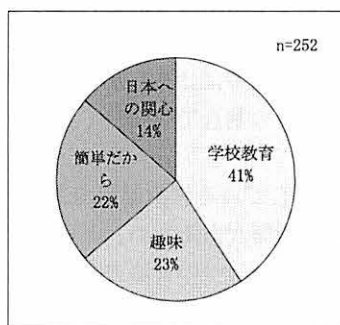


図7 日本語学習の動機

(3) 日本語学習の目的

韓国人高校生の日本語学習目的についての回答結果を図8に示す。主に、「成績と関わっているため」という回答が全体の37%あり、「言語力を上達させるため」(37%)という回答と合わせて、全体の目的のほとんどを占めている。その他、「旅行にいくため」(13%)、「趣味で」(8%)、「将来のため」(5%)などの回答があった。これからの結果から成績が最も重要視されつつも、言語そのものへの関心も高いということが分かった。(図8)

言語そのものへの関心が高いだけでなく、旅行や趣味で、将来に日本で働く夢など、高校生にとって日本語、日本という国の存在は、身近なものとして捉えられているようである。10年ほど前までは、海外旅行や、日本での就職などは考えられない時代であった。韓国における日本や日本観というのは、ここ最近で大きく変化してきた表れであろう。

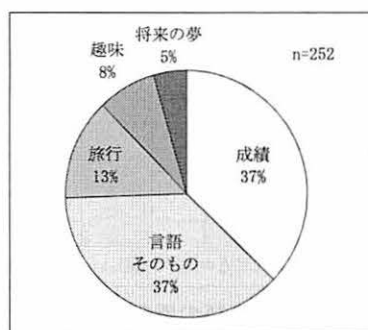


図8 日本語学習の目的

ここまで述べてきたように韓国社会においては、外国語の必要性に関係なく、外国語能力を重要視される傾向があると考えられる。そのため、より多くの言語を、より早い段階から学習させようとする動きは加速している傾向を読み取れる。筆者が実際韓国で日本語を習っていた10年以上前ならば、韓国では、外国語を使う必要があるかどうかということに関係なく、英語やその他の外国語に対する認識やニーズが高かった。筆者は高校卒業と同時に、日系企業に入社し、約2年半務めた経験がある。高校でたった一年しか日本語を学ばなかったにもかかわらず、入社時の面接で、日本語で質問を受けて戸惑ったことを覚えている。そして、その後の業務でも日本語を使う機会は全くなかった。

そういう経験からも、韓国社会が求める何となく必要な外国語能力、やらねばならない外国語学習への無言の圧力を、韓国人高校生のアンケート調査の結果に読み取ることとなった。日本語がやりたい、日本語が必要という意見ではなく、成績のため、あるいは何かしら外国語能力が求められるためといった意見が多かった理由は、上述したような韓国社会全体を覆う雰囲気強く反映しているものだと考える。

(4) 実際の日本語教育の現場

韓国の高校で行われている日本語の授業に関して、現在行われている授業に対する意見や授業での日本語学習の難易度、日本語力に対する自信度についても調査することにした。

「楽しくない」をスケール0として、「楽しい」はスケール100で表すこととし、被験者に自分に合う所にチェックを入れてもらうようにして回答してもらった。その結果、「日本語のクラスは楽しいですか、楽しくないですか」という質問に対し、「楽しい（84名、34%）」、「とても楽しい（68名、27%）」という肯定的な意見を持つ生徒が合わせて約61%を占め、半数を超えている。

反対に、「楽しくない」という気持ち強い生徒は、全体の18名、7%であった。「どちらかという楽しくない」と考えている生徒も79名、32%あった。つまり、韓国での日本語学習は、「全く楽しくない」と思っている高校生はわりあい少なく、概ね楽しく取り組んでいる生徒が多いということが分かったのである。（図9）

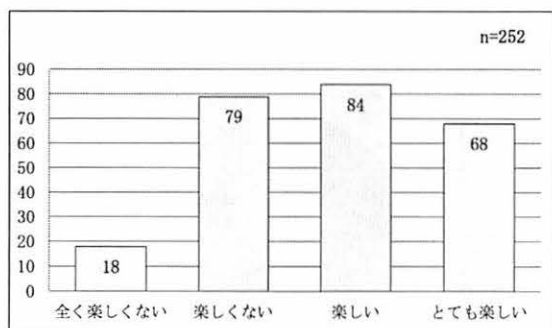


図9 日本語の授業への印象

さて、「学校の日本語の授業が何かに役立ちますか、役立ちませんか」という質問についての回答をみてみよう。「全く役立たない（28名、11%）」と否定的な意見は、約11%であった。また、「役立たない」は77名で、約31%である。一方、「役立つ（91名、36%）」、「とても役立つ（54名、22%）」と合わせると145名にのぼり、約58%もの高校生が肯定的に捉えていることが分かった。高校生が教室を一步出ると、それほど日本語を使う機会はないので、現段階で「役に立つ」とはっきり言い切るのは難しいと考えられる中「役立つ」と考えている生徒が多いことが示された。（図10）

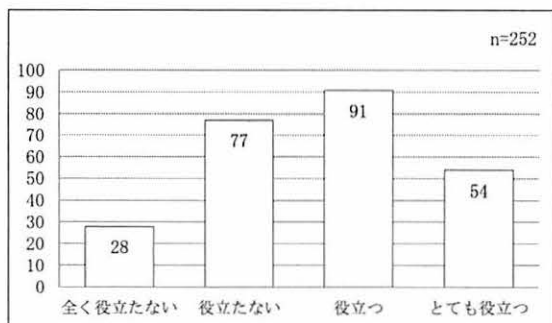


図10 学校の日本語の授業への満足度

次は、日本語の授業が難しいと考えているかどうかである。結果としては、一番多かった意見が「難しい」で80名、率にして約32%、二番目は「易しい」で75名、約30%、三位は「とても易しい」と「とても難しい」が同数で46名（約19%）という順になった。（図11）

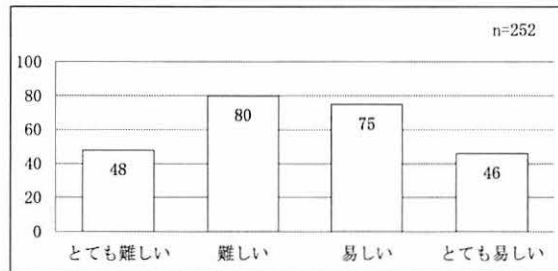


図11 日本語のクラスの難易度

授業の難しさという点では拮抗しているといえよう。学習者全員のレベルに完全に合うような授業展開は難しいが、そこには、教員側の意識の問題も大きく関係するだろう。他にも生徒の個人的な興味や、外国語学習に対する適性といった要因も授業への感想に影響すると考えられる。例えば、どのような教授法で日本語を教えれば、高校生たちが入門レベルをより楽しく感じ、積極的に参加できるのかを考えなくてはならないわけである。これに関しては、朝鮮語教授法の研究を進めていく中で今後追求していきたいと考える。筆者は、特に日本における韓国語教育についての研究をしているからである。また韓国においても、日本語だけではなく、すべての外国語教育を視野に入れて掘り下げていく課題であると考ええる。

たとえば英語のように学習者が長年勉強し、レベルに個人差がある科目とは異なり、学習し始めてからそれほど時間が経っていない日本語を「難しすぎる」と感じている高校生がこれほど多くいることはとても残念である。「とても難しい」と答えた生徒の中には、自らそれほど勉強しておらず、そもそも興味がない、だから難しいと答えた生徒もいるだろう。しかし、まだ日本語の勉強をし始めた、初期段階である高校生たちが、これほど偏った意見を持ったまま授業を受けているということは、軽視されてはならないことではないだろうか。

「日本語が易しい」と答えた理由としては、他の外国語と比べて、日本語は韓国語と語順や文法が似ているため分かりやすいということが一因として挙げられよう。一般的に、韓国語と日本語は文法が似ているということは、両国の学習者が互いの言語を学ぶ上で強いメリットとして働くとも考えられる。その他、韓国語と比べて日本語は音の数が少ないため発音がしやすいなどの理由も関与しているだろう。

（5）日本語能力に対する自己評価

被験者の高校生たちに、自分自身の日本語の能力について、読解、聴解、作文、会話という4項目に分けて自己評価をしてもらった。項目ごとに少しばらつきはあるものの、全体的にみても、どの項目においても、「全く自信がない」、あるいは「自信がない」という生徒が非常に多いことが分かった。日本語の授業自体には楽しさを感じつつも、作文や読解、聞き取りといった活動に非常に不安を抱えている生徒が目立つという結果である。（図12）

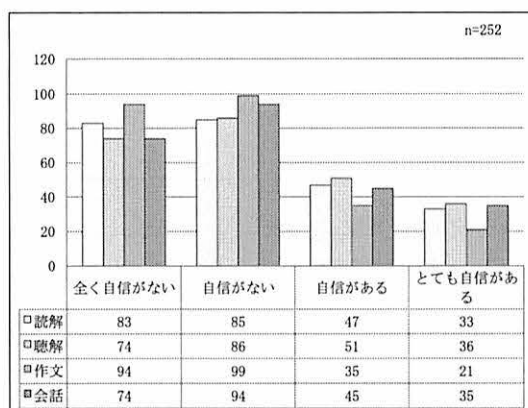


図12 高校生の日本語学習の自信と不安

この自己評価の結果からは、現在の韓国の高等学校の日本語授業における数多くの矛盾が浮き彫りになったといえよう。質問項目12、13、14の回答結果と合わせて考察してみよう。

生徒は、学校の日本語の授業が楽しいと感じながら受けている場合は、日本語の授業で学習したことが役立つと思っている傾向にある。一方、楽しくないと感じながら受けている生徒は、日本語の学習は役立たないと感じているのである。(図13)

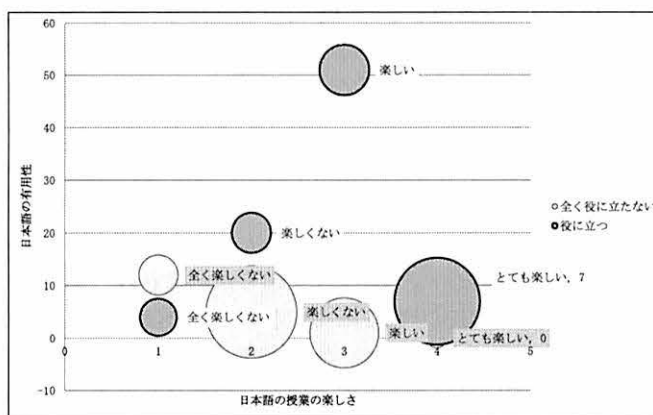


図13 日本語の授業の楽しさと日本語学習の有用性

続いて、自己評価の結果である。どの技能においても「全く自信がない」、あるいは「自信がない」という答えが顕著であった。つまり、高校からスタートした日本語学習であるが、最初の段階ではそれほど日本語力に差もなく、不安もない状態であったのが、わずか1年あまりで、日本語に対する不安が大きくなるのである。この現象は、すべて日本語を教える授業の中で生まれたと言えるだろう。高校生にとって、学校での外国語教育は、これから先、その言語を話す、その国そのものへの関心につながる重要な時期である。その段階で、しかも短い授業時間の中で難度の高い語彙や文法事項の修得のみを目的にした授業をすることは意味があるの

だろうか。そうではなく、自立的、主体的に考え、学ぶことこそ重要であろう。さらに今後その日本語力を何につなげていくのか、そういったことへの気づきということの方が重要であると思わずにはいられない。日本語学習を始めたばかりの生徒たちが、日本語に対する不安ばかりが多いという結果は、非常に残念であり、早急に改善したいと考える。

さらに、4技能に分けず、自分の日本語力全体について0点～100点のスケールを与え、評点をつける質問をしてみた。総合点でみても、「どちらかという自信がない」と答えた生徒が全体の約69%にも上った。(図14) 日本語の授業が楽しいと感じ、それほど難しくないと感じながら、しかし、自信がもてないのはなぜだろうか。大きな矛盾の理由を探る必要がある。

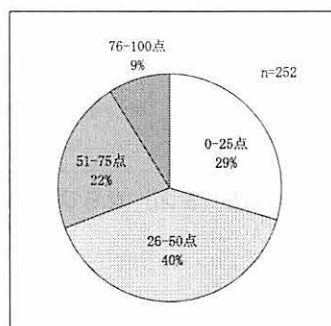


図14 自分の日本語力の点数化

高校生は日本への憧れや興味をもつことで、日本へ行ってみたい、あるいは日本語は楽しいと思っている。しかし、日本語の授業で実際に行われる内容は、高校生が想像していたこととは異なり、試験に合わせた訓練である。そのため、日本語学習は難しいという印象に変わるのではないだろうか。

英語の場合は小学校、中学校、あるいはそれ以前から接する機会があって、すでに好きか嫌いかが分かれているのに対し、高校生にとって日本語はまだ出会ったばかりの新鮮な言語である。学習を開始する前から既に得意不得意が分かれている英語の場合と異なり、誰もが同じゼロのレベルから一緒に学び始め、自分にもできるかも知れないという期待を抱いている。だから、この段階では日本語学習は楽しいと思わせることが何よりも優先されるべきである。しかし、実際には、試験や成績のために仕方なくやっているという圧力を感じ、大きな矛盾を生じさせているのだ。

一般的に外国語学習においては、「話す」ことへの不安が大きいといわれているが、韓国の高校生は、日本語作文や読解についても大きな不安を感じていることが本調査から明らかになった。このことは、会話活動が教室内でほとんど行われていないためではないかと考える。その一因として、学校教育では決められたカリキュラムをこなすことが重要であり、時間的に余裕がないために会話の指導にまで手が回らないといったことが考えられる。このことは実際に、その教育現場で日本語を学習した一人として筆者自身も感じていた。こうしたことが、一年間日本語を習っても使えない状況を生み出し、学年が上がるに従って日本語嫌いを増長させ、あるいは、卒業と同時に日本語を忘れてしまう状況をもたらしているのであろう。日本語

は「楽しいが、難しく自信がない」という意識から、「難しいが楽しく自信がついた」という意識に変えることが、韓国の高校における日本語教育に課せられたもっとも大きな課題といえよう。次の項目の質問では自己評価の理由について聞いてみた。

「自分の日本語力につけた点数の理由を教えてください」という質問の結果は、以下のとおりである。(図15)

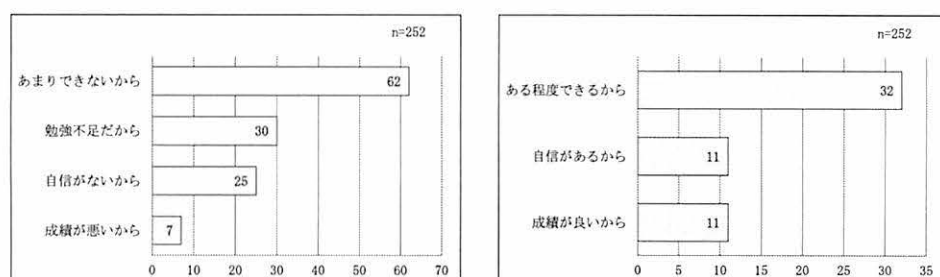


図15 日本語に自信がない理由 (左図) ならびに自信がある理由 (右図)

自信がないと答えた生徒の意見としては、「あまりできない (62名、50%)」、「自分自身の勉強不足だから (30名、24%)」、「自信がないから (25名、20%)」、「成績が悪いから (7名、6%)」であった。

反対に、自信があると答えた生徒の理由としては、「ある程度できるから (32名、59%)」、「自信があるから (11名、20%)」、「成績が良いから (11名、21%)」という結果であった。

高校生が自分自身の日本語能力を図る方法とは、実際に学校以外の場所で日本人とコミュニケーションが取れたり、日本への旅行の際に使えたり、検定試験を受けた結果であったりという具体的かつ客観的な理由ではないことが分かった。

高校生という立場や環境から、日本語に対する自信を感じる基準は授業内の活動がほとんどであり、また授業で行われた活動の結果を示す評価としてのテストの成績などから得られているのである。つまり、テストの結果が悪いことが、自信を失わせ、ひいては勉強不足であるという思いを作り出すのである。反対にテストの結果が良い、だから自信がある、あるいは、ある程度できると感じているから自信を持っているという連想を生み出しているわけだ。

(6) 高校生が考える日本語学習における今後の課題

全体的に日本語力には自信がもてない生徒が多いという結果であったが、高校生たちは日本語能力の上達のために、どのような努力をしているのだろうか。その結果「何もしていない」という生徒がもっとも多く75名 (約39%) にも上った。その他は、「授業を頑張る (50名、26%)」、「勉強する (39名、20%)」、「日本のアニメや映画をみている (22名、12%)」、「実際に使ってみる (5名、3%)」という内容が続いた。このことから、高校生にとって日本語とは、数多くの教科の中の一つであり、大学進学や就職のための一つの道具であるのだが、日本語だけにそれほど勉強の時間を費やすことはできないという本音がうかがえる。

実際に何もしていない理由は「あまり時間がない」「他の勉強で忙しい」という意見もあっ

た。日本語を専門にやっているわけではないので、入試を目の前にして、日本語力の上達のために何ができるか、すべきかについては、考えることすらしたことがないといった印象を受ける。

次に、自分の日本語力上達のためにできる方法についてどのように考えているかを尋ねてみた。最も多かった意見は、自分自身の努力に関するものであった。このことから、努力をしていないから上達しない。さらにいうと、努力をする必要がそれほどない。また、他の教科への負担もあり、日本語だけにそれほど時間をかけられないという高校生の現状がやはり見てとれることとなった。つまり、高校生たちは、日本語を学習することにメリットを感じていないといえるだろう。

高校生が日本語能力を向上させるためにやるべきこととして、ただ努力することをその方法として回答しているのはどうしてだろうか。(図16) 実際の教室内での活動が、暗記や文法を中心に行われていること、また、毎日のように単語や漢字のテストをすることなどに起因していると思われる。その結果、成績のためには暗記しかないといった短絡的な思考に走っている生徒を生みだすことになっているのではないだろうか。そこに、筆者は危惧を覚える。つまり、学習者の自主性や自律的な学習態度を培うような教授法や生き活きとした教室活動が行われていないという問題点が潜んでいるのである。日韓の「言語の近さ」というメリットを最大限に活かす指導法が開発され実施されること、そのことが、これからの韓国の高校における日本語教育の未来を変えると信じる。

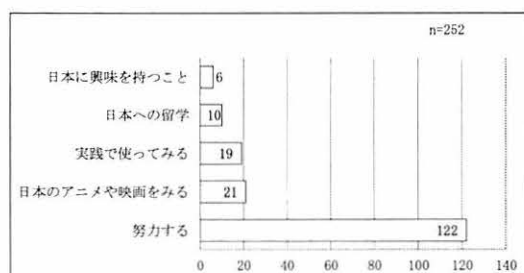


図16 日本語力上達方法

以上のように、韓国人高校生の日本語に対する意識を質問紙による回答結果から分析、考察を行ってきた。そこからは、日本語学習に対して非常に矛盾した意見や考えをもっていることが明らかに読み取れる。今回の調査では、被験者数が252人であるため、韓国人高校生全体の意見や考えということとはできないが、一つの傾向を捉えることはできたのではないだろうか。

高校生たちは、日本語は楽しいけれども難しい、役に立つかどうか分からないがこれからも勉強を続けたい、という二面性をもっている。この調査からは、韓国人高校生の学習動機や学習目的を明らかにすることに至らなかったが、自分の意思ではどうすることもできない環境下で、すでに必修科目として設定されている教科を、学習動機がないまま目的も明確にされずに学習を続けざるを得ない現状であることを報告する。韓国人高校生は学校教育の一環として、成績のために日本語やその他の外国語を学んでいる現状があり、そのことによって生み出される多様な矛盾点があることが浮き彫りになった。

Ⅳ おわりに

本調査を通して、韓国的高校生は日本語そのものへの興味を抱きつつも、学校教育の一環として強制的に学習させられるという外的要因に大きく影響されていることが分かった。実際に、日本語は韓国語と語順が似ていることや、発音が比較的に楽に修得できることから漠然とした親近感を抱いているが、実際の教室環境での取り組みといえば、筆記試験での成績評価という、自らの興味とは異なったゴールを目指さざるを得ない。したがって、興味はあるが自信はもてないといった心理状態におかれている。一方で、今後日本語学習を続けたくないと否定的に考えている生徒は少なく、むしろ、続けたいと考えている生徒の方がはるかに多いという結果が得られた。これは、現在は、成績をよくするためにとりあえず学習しているが、将来的には日本へ行くことや仕事で使うことなどを想定して日本語を学習している場合もある。言い換えれば、今すぐ必要がなくても、将来何か役に立つであろう、あるいは外国語とはとにかく学習すれば良いといった外国語に対するいわゆる崇拜思想が韓国社会全体の基底にあり、高校生である被験者たちの外国語学習の動機や態度に強く影響しているものと思われる。

今回の調査では、被験者を高校生に限定したため、韓国人全体の日本語学習者について論じる材料としては不十分だったと思われる。そのため、今後は、学校教育の一環としての、制限された日本語教育を受けている、ある意味、特別な環境にある高校生に限らず、大学生や、日本語学校の学生、社会人等、広範囲にわたる日本語学習者についても調査し、比較考察を行う必要を感じている。

韓国では、日本語を含む外国語学習に対する熱意が年々高まっているが、「開始時期」にこだわる外国語教育から、「質」を重んじる外国語教育へと抜け出す努力をする時期がきたのではないだろうか。さらには、学習者中心のデータ調査だけでなく、今後、教育省が提示している教育目標及び、実際の教員側の環境といった、外国語教育を考えるうえで必要な三要素を均等に考察することが必要であると思われる。そうすることで、同じJFL (Japanese Foreign Language: 日本語を外国語として学習すること、以下JFLと示す) の日本語学習者を対象として、動機づけやよりよい教授法を明らかにできるのではないかと考える。真の外国語教育は、学習者、教員、教室環境といった全ての要素が一つの目標で一致してこそ、成功するものであろう。そのため、学習者の立場からの意見だけではなく、教員や教室環境への視点も加えて韓国における日本語教育を調査することが今後必要である。

そもそも外国語をなぜ学ぶのだろうか。筆者は、外国語学習の意義は、その言語を使う社会や人々との相互理解と共に、交流のための一つの道具としての役割を果たすことだと考える。

本稿を通して、現在の韓国における日本語教育の事情を知り、問題点を把握することができた。今後も続けて「韓国におけるより良い日本語教育」について考えていきたいと思う。

効果的な外国語教育、効率的な外国語学習は、決して学習者サイドからの視点のみでは捉えられない。教員側と学習者側、そして、社会全体の意識が変わらなければ、現在の、成績のための、強制的な外国語教育から抜け出すことはできないだろう。「国際化」という言葉にだけ惑わされて、試験の結果だけで学習者を判断するのではなく、習得過程における取り組みや授業内活動への適切な評価なども効果的な第二言語学習を生み出す視点へとつながるのではないだろうか。筆者自身も、現在日本の大学で韓国語を教えている。教壇に立つ際、言葉の知識を伝えることも大事ではあるが、一つの言葉を学ぶことによって、そこから相手や相手国、自分

付録

韓国人高校生の日本語学習における実態調査
(このアンケートは本調査以外の目的では一切使われません)

1	海外に留学してみたいと思いますか		はい	→	いいえ
2	行きたい国とその理由を教えてください	→			
3	これからも日本語の勉強を続けたいと思いますか		はい	→	いいえ
4	その理由を教えてください	→			
5	日本語を勉強することが、何かに役立つことはありますか		はい	→	いいえ
6	将来役立つことがあると思いますか		はい	→	いいえ
7	6で「はい」と答えた方: どんなことだと思いますか	→			
8	日本語以外に留まっている外国語がありますか		はい	→	いいえ
9	その理由を教えてください	→			
10	日本語の勉強を始めた動機は何ですか	→			
11	現在、何を目的に日本語を勉強していますか				
12	学校の日本語の授業について教えてください	全く楽しくない	9	→	とても楽しい
13		役に立たない	9	→	役に立つ
14		難しい	9	→	易しい
15		読解に自信がない	9	→	読解に自信がある
16		聴解に自信がない	9	→	聴解に自信がある
17		作文に自信がない	9	→	作文に自信がある
18	自分の日本語力について教えてください	会話に自信がない	9	→	会話に自信がある
19		自分の日本語力に点数をつけるとしたら何点ですか	0点	9	→
20	その理由を教えてください	→			
21	日本語の力をつけるために、自分でどんなことをしていますか	→			
22	どうすれば日本語力は上達できると思いますか	→			

◎調査にご協力頂きありがとうございました

注

- ¹ 韓国では高等学校からすべての学校において英語に加え、日本語や中国語、ドイツ語、スペイン語などといった、第二外国語が学ばれている。最近では中学校の段階から英語に加え第二外国語を取り入れている学校も増えつつある。一つの高等学校に、一つの外国語科目が指定されている場合、高校生たちは自ら学びたい言語を学ぶのではなく、自分が所属している高校が開講している外国語を学ぶことになる。または、二つ以上の外国語を開講している高等学校の場合は、生徒が自ら学びたい言語を選んで学ぶことができる。学びたい外国語を学校が指定するのか、生徒が選択できるのか、各高校により異なる状況である。
- ² 『アジア経済』2010.08.16記事

韓国 の 高校 に おける 日本語 学習 の 実態 調査 — 45 —

点を探してみたりした。でも、いざ仁川は全国において過去6年間語学成績が最下位だったことが、ソン市長を悩ませている。

<http://www.asiae.co.kr/news/view.htm?idxno=2010081608280115776>

3 『レディキョンヒョン』（韓国女性誌）2015年11月号

中一の母のための中学校入学準備ABC-中学校は必修科目（国語、英語、数学、社会、化学、体育、音楽、美術、技術、家庭、道徳）と選択科目（漢字、コンピューター、環境、日本語、中国語など）と分かれる。ところで重要なのは教科目の数だけでなく、教科内容もずいぶん進化されるということだ。よって、公式さえ覚えれば良い成績がでる初等学校（日本の小学校に当たる）とは違い、原理と概念を疎かにすると、試験で効果を出すのが難しい。また技術型出題の比重が高くなることで、面倒でも、解釈過程を正確に論じる訓練をしなければならない。

<http://lady.khan.co.kr/khlady.html?mode=view&code=13&artid=201511051506321&pt=nv>

4 『ヨンナム日報』 2015年10月20日〔1998年今日〕日本の大衆文化一次解放

1998年10月20日政府が日本の大衆文化を一次解放することを発表した。世界四大映画祭で受賞したことがある日本映画及び日韓共同制作映画の上映、日本の俳優の韓国映画への出演などが許可された。日本映画が国内の映画館で上映されるのは、光復節（こうふくせつ）以来53年ぶりのことである。1999年9月2次解放以来、公開された「ラブレター」は120万観客を動員するという記録を残した。

<http://www.yeongnam.com/mnews/newsview.do?mode=newsView&newskey=20151020.010080740510001>

5 『Ohmynews』 2015.11.16、チョチョナン記者）昔の三つ口船艙たち、どれほど荒唐だっただろうか。朝鮮人の食堂組合を含むベーカーリー組合、鉄道労働組合、青年団体発表会、劇場後援、還暦祝いの席、結婚式場、親睦集まりなどでも君が代の熱唱と宮城遥拝が強要された。結婚式も日本の国の始祖を仕える神社で行うことを宣伝していた。群山神社を背景に撮影された結婚記念写真が度々発見されていることから、多くの朝鮮人が日帝荒民化政策に同調したことが分かる。

http://www.ohmynews.com/NWS_Web/View/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0002160302

6 筆者の伯母は韓国で生まれ、現在87歳である。韓国語が禁じられた時代を生きていた張本人である。筆者も小さい頃に伯母から戦争の話や、日本語を強要された時代の、生の話を耳にすることがあった。伯母は、その時代日本名も持っていた。現在は韓国名のみで日本名を使用することはないが、現在でもその名前を忘れられていない。長い年月を経ても、日本語を忘れず話すことができ、日本名を忘れず記憶しているのである。

参考文献

고바야시미나 (2004) 〈일본어교수법입문〉 건국대학교

小林ミナ (2004) 『日本語教授法入門』 建国ク大学

테보라스티팩 (1999) 〈학습동기〉 학지사

데보라스티팩 (1999) 『学習動機』 学志社

박이도 (2000) 〈세계화시대의 모국어습득과 외국어습득〉 한국문화사

- 박익도 (2000) 『세계화時代の母国語習得と外国語学習』 韓国文化社
- 이덕봉 (1998) 〈일본어교육의 이론과 방법〉 시사일본어사 (주)
- 이덕봉 (1998) 『日本語教育の理論と方法』 時事日本語社 (株)
- 이덕봉, 김태호 (2001) 〈고등학교 교육과정 해설〉 교육인적자원부
- 이덕봉·김태호 (2001) 『高等学校教育課程解説』 教育人的資源部
- 이덕훈 (2003) 〈일본어교육의 이론과 방법〉 시사일본어사
- 李德奉 (2003) 『日本語教育の理論と方法』 時事日本語社
- 이묘희 (2004) 〈일본어학의 이해〉 충남대학교출판부
- 이묘희 (2004) 『日本語学の理解』 忠南大学出版部
- 이명희, 정희영 (2004) 〈일본어교과교육의 이론과 실제〉 책사랑 (도)
- 이묘흔·최종진 (2004) 『日本語教科教育の理論と実際』 チェクサラン
- 정종진 (2003) 〈동기의귀인이론과학교학습〉 학지사
- 최종진 (2003) 『動機の起因理論と学校学習』 学志社
- 최종진 (2001) 〈학교교육과 동기〉 교육과학사
- 최종진 (2001) 『学校学習と動機』 教育科学社
- 폴제론 (1997) 〈성공커뮤니케이션과 동기부여〉 북이십일 (주)
- 폴제론 (1997) 『成功コミュニケーションと動機付与』 ブック21 (株)
- 河先俊子 (2013) 『韓国における日本語教育必要論の史的展開』 ひつじ書房
- 追田久美子 (2002) 『第二言語習得研究』 アルク
- 海保博之・柏崎秀子編 (2002) 『日本語教育のための心理学』 新曜社
- 金京愛, 鄭賢珠 「韓国文化への招待－ことばの日韓比較」 (2015)
- (田口紀子編 『大学からの外国語－多文化世界を生きるための複言語学習』 京都大学学術出版会 (2015)
- 金宥暻 (2014) 『韓国人日本語学習者による日本語テキストの分かりにくさの要因分析』 花書院
- 小池生夫編集 (2004) 『第二言語習得研究の現在』 大修館書店
- 望月通子 (2004) 『日本語教育学の新視座』 関西大学出版部
- 森山卓郎 (2004) 『コミュニケーションの日本語』 岩波ジュニア親書
- 吉島茂 (2014) 『外国語教育V－一般教育における外国語教育の役割と課題』 朝日出版社